カラフル

蓮獅子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カラフル

【Ｎコード】
Ｎ４８０１ＢＡ

【作者名】
蓮獅子

【あらすじ】
好きになった女性はセックスフレンドの妹。歌舞伎町で働くバーテンダーの恋は４ヵ月後、冬の始まりと共に終焉を迎える。

ウエディングドレスは白がいいかな。それとも、カンパリみたいに真っ赤がいいのかな。

――その声に心は見事にほだされる。

セックスフレンドの由希から電話があったのは、仕事が終わってすぐの午前0時を回ったころだった。

「今からうちの部屋で飲まない？」

由希が住んでいる場所は確か世田谷の明大前、新宿駅へ向かう帰路は相変わらずの人いきれ。由希が退院して間もないことを考えるとセックスをすることですら一歩身を引く、ましてや子宮……。

「からだはもう大丈夫。それに、妹が一緒にいるからそういうのじゃないわよ」

そのことばで気が楽になった気がした。頭の中は家路への埼京線から京王線に切り替わり、到着の予定時間を考える。明大前には行ったことはないけれど、居酒屋の1件くらいあるだろうと言う予想は、都心に住んでいたら大概が正解する。

「部屋にカンパリがあるの。本物のバーテンさんに作ってもらいたいんだ」

コンビニに寄ってソーダ水とレモンを買って、由希の妹の好みまで走らないけれど適当につまみを選んだ。ポテトチップにチョコレ

ート、それにカシューナッツ、多分それで十分だろう。
由希には確か彼氏がいたはず、駅のホームの人波の中でコンビニ袋を片手に考えてみた。妹にはおれのことをなんて紹介するんだろう、そんな悩んだところで友達――確かにトモダチには違わない。
ホームとホームの間から見える夜の空は、雲かスモッグかは知らないけれどいつもと変わらない。月も見えない。
今日は水曜日になったんだ、なんて考えてたらホームに電車が入ってきた。人と人とに押されて後はそれに任せるまま、波が止まったところで立ち止まる。すると、二十歳くらいの女の子がからだの角度を間違えたんだろう、おれと正面を向きあう姿勢になってしまった。
冗談……そのまま扉は閉まり電車はゆっくりと加速していく。正面の女の子は気まずそうに左を向く、鼻息が当たりそう、僧思ったからおれは右を向いた。胸元からは白いブラの肩ヒモがのぞいている。

今日はセックスはなし、自分で自分に言い聞かせ落ち着かせようとしても、心臓は勝手に鼓動を高めてしまう。服越しに、ブラ越しに伝わらないかななんて考えすぎだろうけど肩は、女の子の肩は小さくて手のひらですっぽりと包めそうだ。

◇◆◇◆◇◆

違うことを考えた――あれは由希が入院する数日前だ。由希とラブホでセックス……確か騎上位から正常意に体位を変えたときに由希の携帯電話が鳴った。

「彼氏からだ」
「出れば？」
「今？」

「そう」

ハダカの由希は携帯電話を手に取り通話ボタンを押した。その間、念のために腰の動きは止めている。

「もしもし……」

電話に出た由希の顔には嬉しさや笑顔はなかった。なんなら別れ話でもはじめるんじゃないかと思うほど目はまっすぐに天井を向いている。

だからちょっとイタズラを考えてみた。彼氏と電話してる由希にキスをする。驚いた由希の顔がおもしろくて舌を出してディープキスに発展させた。左の耳からは携帯電話からかすかに聞こえてくる彼氏の声、おれと由希の唇からは唾液の音、そっと唇を離すと「もう……」由希は多分口を動かしてそう言った。

「しいっ」って人差し指を口に運ぶ。「そっちでしょ！」そう由希の唇が動く、それを笑顔で返して腰をゆっくり動かし始めた。

「ちょっと！」

焦った由希がそう言う。「ううん、なんでもない」そんなことばを紡ぐと同時に眼を閉じる。彼氏との会話はどうやら次のデートの約束、必死で洩れそうな声をガマンして眉間にシワを立てる由紀の――欲求不満なのかな、7月の京王線の電車の中は暑く、正面の女の子の胸元にもうっすら汗がにじんでいる。

明大前で電車からホームに降り立つ。さっきまで向かい合っていた女の子はここで降りたのかそうじゃないのか、知らないけれど深く考えたら不思議なこと。けれどあまり考えずに改札へと向かった。

「今、駅に着いたけど」

由紀に電話口で案内されるまま居酒屋とラーメン屋を横目に大通りへと出た。「そういや腹減った」のことばにカレーライスのじゃがいも抜き作ってあるよとの返答。なんでじゃがいも抜き……由希は確か北海道の出身だったことを思い出しながら、北海道イコールじゃがいもという図式を考えつつそれでも足取りを速める。

多分、部屋着だろうピンクのパジャマを着た由希は一際大きなマンションの下に立っていた。

「久しぶり」由希の頬が少しやせた気がした。「気を遣わせちゃった？　重かったでしょ」

「大丈夫だよ。でも思ったより元気そうでよかった」

パジャマの柄は花。なんの花かは知らないけれど、熱帯地方っぽいキレイな花だ。

「あのさ、普通は彼氏とか呼ぶんじゃない？」

「だって彼氏より雅くんの方が楽しいんだもん」

由希の部屋はマンションの2階、エレベーターに乗るとすぐに到着した。

「どうぞ」

由希に促され、1DKの部屋の玄関を開けると小さな由希が、グレーのスウェット姿で立っていた。

「こんばんは、斉藤恵理です」

「あ、どうもこんばんは。皆川雅也です」

瓜二つとまではいかないけどやっぱり小さな由希、それが恵理さんの第一印象。髪の長さも違う、目の大きさも違う、指も胸も……やっぱり欲求不満らしい。由希の「わたしの妹かわいいでしょ」ってことばに「そうだね」なんて答えて恵理さんがクスって笑う。女性2人に男性はおれひとり。けど2人の表情からは最低限、これから楽しい時間を過ごせることが予想できた。

「さあ入って、バーテンさん」

由希に促され厳寒に足を踏み入れたとたんに香るスパイスは、空っぽの胃をこれでもかってくらい誘惑してる。

「おじゃまします」

薦められるテーブルの上には、デザインがかわいいグラスが3つと真っ赤なボトルが1本。

CAMPARI

イタリア生れのそのボトルの名前はカンパリ。いわゆる食前酒の類(たぐい)。真っ赤な液体の表面は少しの新藤で波を打ち、これから始まる食事を楽しむ手助けをしてくれる。

今日は酔いそうだ、その予感は見事なほどに的中し、結果的に恵理の唇にキスをするーーそして、カンパリのように恋をした。

「こんな格好でごめんなさい」

「時間が時間だし気にしなくていいですよ。それにおれこそこんな時間に……」

「なに堅いこと言ってるの」

会話の始まりはそんなだったかな。とにかくどう話題を持っていけばわからなくて、グラスを3つ手にとって氷を入れ始めた。

「バーテンさんなんですよね」
「そうですよ」
「雅くんはカクテルの全国大会にも出たことあるんだよ」

恵理さんの驚いた顔に「すごい」っていうセリフ、確か「どうせ下のほうですよ」そう言った。

「プロの人にカクテル作ってもらえるなんて嬉しいです」
「でもただ混ぜるだけですよ」
「それが素人とは違うのよ。あ、レモン切ってくるね」

由希はそう言うと買ってきたレモンを手に立ち上がった。

「あ、由希、シャフトで」
「シャフトってなに？」
「あ、ああ。ヘタ取って縦に8分の1に切ってくれるかな」

そんな専門用語にいちいち感嘆する二人に、本当は鮮度の問題から6分の1って思ったけど、レモンが足りなくなりそうだし面倒だから口を紡んだ。

「シャフトでね！」

由希は自慢げにそう言ってキッチンに向かった。その間、部屋には恵理さんと2人きりになる。数年前ならそんな状況に緊張もしていただろうけど慣れ……少しは緊張しているけど仕事柄、女性と話すことになれた自分。

「恵理さんって仕事は何してるんですか？」

会話がなければ「仕事は何を？」か「今日は暑いですね」のどっちかを振ればいい。後はそこから広げていく。

「看護師です」

「そうなんですか。ストレス溜まるって聞きますけど」

「はい、実は」

「解消は、お酒？」

普通、女の子の部屋にカンパリは置いていない。それに由希はカンパリを飲むと言っていた。グラスは3つ、と言うことは恵理さんもカンパリを知っている。所謂お酒がすき、それが予想。

「大好きなんです」

ビンゴ！

「シャフトできたよ」

「おお、ちゃんと芯と種までとってあるじゃん」

「任せて」

レモンをグラスに落とすとカンパリのボトルを手にし、トップを中指ではじく。

キイン……。

はじいたトップを指に挟み、カンパリ1対ソーダ水2の割合を頭の中で考えてグラスに注ぐ。霜が張った氷を洗う真っ赤なカンパリ

がグラスの底に到着する頃には、あとはソーダ水で満たされるのを待つばかり。

「なんかカッコイイ」
「そっかな」

恵理さんについつい貯め口になりつつも、ソーダ水をグラスに注ぎバースプーンの代わりにピンクのおはしでビルド、炭酸を飛ばさないように優しく混ぜれば完成。

「さあ、飲もう」
「うん」
「はい」

由希の隊員岩井に乾杯し、カンパリを口に付けた。其の天見と苦味が下を流れつつ香りは鼻をくすぐる。伊に到達する頃にはもう2口目を口に運んだ。

「おいしい」
「やっぱりプロが作ると違うね」
「だから混ぜるだけだって」

そういいながらも笑顔になるのは自然、カンパリが3人の会話を盛り上げるのも自然、おなかがすいてるのは明大前についたあたりだから自然？

「由希、カレー食べたいんだけど」
「じゃあ、あっためてくるね」

視線がグラスから由希を追う途中、その途中で恵理さんの右手の

指に止まった。恵理さんの細い人差し指と中指が、真っ赤なグラスをそっと掴んでいる様。
その細い指、カンパリのせいじゃなくてキレイだ、そう思った。正直そう思った。

カレーは普通に、いやフツー以上においしかった。

「これ市販なの？」
「ん？　そうだよ」
「旨いね。由希が作ったの？」
「恵理と2人で、ねえ」

カンパリとカレーが妙に合う。きっとカレーの味は中辛かな、気が付けばおかわりをしていた。

「ところでさ、斉藤姉妹は北海道出身だよね。なんでじゃがいも……」

別に北海道だからってみんながみんなじゃがいもを好きとは限らない。その説明に納得できるような気もするけど、別につっこむ理由もない。

「カンパリのおかわりは作りますか？」
「ありがとうございます」
「お店みたい」

由希と恵理さんの2人はもうカレーを食べたらしく、おれが買ってきたつまみに手を伸ばしていた。時計はもう1時半、当然と言えば当然だろう。

「由希さ、なんだっけ、そうそう子宮内膜症と子宮筋腫ってどんななの？」
「女の子の病気」
「手術は？」
「したよ」

膨らませていい話題なのか分からなかったから「痛いの？」って聞いて「そりゃあね」って返ってきて終わりにした。その後の話は恋愛感、おもしろいくらいに盛り上がった。

「おれの店に大塚ってやつがいてさ、分かれた彼女とよりを戻そうとして東京中を探して生れ年のワインを探したらしいんだ。数万円したって言ってたかな。それで、彼女の誕生日に花束と一緒に家に持っていったら、かわいそうに玄関でワインだけ渡して門前払いだってさ」

「ははは」
「あはは」

カンパリの減る量が早い。その分、酔いも回ってる。

「お姉ちゃんとかれしってうまく言ってるの？」
「恵理は別れちゃったんだよね」
「その話はいいの。皆川さん、その興味ありますよっていう目は何？」
「興味あるねえ」

敬語はいつの間にかどこかに薄れ、その分恵理さんとの距離が縮まった気がした。

「わたしの彼氏さ、なんかね……」

恵理さんの「なになに」ってことばに同調して眼を向ける。３人の右手にはカンパリ、それぞれのグラスに浮かぶ氷は透明、けれど赤い海が反射するセカイ、氷すら赤に染め上げる。

驚いたのは恵理さんと恋愛に対する価値観が同じだったこと。由希の彼氏の話が盛り上がり、どんな内容だったか正直覚えてないけど、それに対する意見は恵理さんと一緒だった。多分、恵理さんも気づいてたと思う。おれのことばに恵理さんが眼を丸くし、恵理さんのことばにおれが笑った。

「だよね」

「やっぱりそうだよね」

バーテンだからってこんなにもカンパリだけを飲んだのは初めて。ボトルの中身がもうすぐなくなる頃、ソーダ水とレモンシャフトが切れたからロックで口に注ぎ込んだ。

「でさあ、彼氏ったら先に帰っちゃったのよ」

「でさあ」の前に由希が言ったことはなんだっけ。それよりも恵理さんの横顔に、笑うと細くなる目に、白い首筋に、艶っぽい黒髪にふれてみたいって思ったのは酔ってるせい？

「雅くんは彼女つくらないの？」

由希の質問に笑ってカンパリを煽る。

「モテそうなのに」恵理さんが言う。「ほんとはいるんでしょ？」

「なんなら彼女になってください」

きっと冗談にしか聞こえていないだろう。こういうところがきっとおれの悪いことだって知ってるけど、でもカンパリのせいにはしたくない。

「またまた」

由希の視線の隣り、笑顔の恵理さんの口元に、目は勝手にそこから離れようとしない。

「2週間も入院してたから生活大変なんだよね」由希があくびを手で隠しながら言う。「どうしようかな」

「優しい彼氏に助けてもらったら」

恵理さんの意見に由希が「そんなに優しくないよ」って言った記憶は曖昧。時計はもう夜中の3時を回ってた。

「そろそろ帰らないと……」

「雅くん始発まだだよ」

「皆川さん少し眠っていけばいいのに」

さすがに少し遠慮してタクシーでなんていってみは見たけど、頭の中はぐるぐるしてるし足は動きたくないらしい。

「いいんなら。じゃあ少しだけ」

恵理さんと由希のまぶたもトロンとしてる。3人でテーブルを片付けて、少しだけ残ったカンパリのボトルを冷蔵庫の隣りの棚に置いた。1DKの部屋の中、ベッドは恵理さんと行き、おれはソファーに眠ることになった。

「おやすみ」

もう少し、もう少しだけ眼を開けていようと思ったけど限界で、黄色しタオルケットをかけた途端に眠ってしまったようだ。次に眼を覚ましたのは大体1時間後、5時くらいだったと思う。寝付けないのはきっとなれた部屋じゃないからだと思う、カーテンの外はうっすら白い。

上体を起こすと2人はそれぞれに寝息を立てていた。ベッドの奥側には由希、恵理さんは手前で目をつぶっている。

1歩近くに寄ってみる――少し動くだけで頭がいたい、飲みすぎ、きっと明日の仕事はツライなって考えながら恵理さんの顔を覗き込んだ。今眼を覚ましたらきっとビックリするだろう、そう思ったけれどその顔は、薄い朝日に指されて、どうしようもないほどキレイだった。

キスをしよう、そう頭で難しく考えたわけじゃない。なんていうか自然に、体が動きそっとその唇に触れた。1秒か2秒、時間で言ったらそんなもんだろう、でも肌を通じて走る電気は、その一瞬に未来を、永遠を感じた。

全部カンパリのせいだ――けれどおれの心は恋をし、恵理さんのことを好きになった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4801ba/

カラフル

2012年1月13日01時46分発行